

浮御堂

浮御堂は満月寺の一部で、琵琶湖屈指の景勝地です。この「浮かぶ東屋」は、湖につながる木造の橋（現在はコンクリート製の支柱で補強されている）の先にあり、まるでこの建物が水面に浮かんでいるかのような見た目を与えています。僧侶・源信（942-1017 年）が、湖上の交通安全祈願のために浮御堂を建立しました。彼が湖が狭くなる堅田地区を選んだのは、湖を渡って物資を運ぶ商人たちに人気のある港だったからです。浮御堂は 1934 年の台風で大きな被害を受けましたが、1937 年に再建され、1982 年には念入りに改修されました。

木造の東屋は飾り気のない簡素な建物で、その建築自体よりも、その寂しげな佇まいと静かな環境で知られています。橋の上には、曲がりくねった老松が低く垂れ下がっており、その枝は木の支柱で支えられています。琵琶湖に面したお堂の脇には小舞台があり、元々は堂内にある 1,000 体の小さな金の阿弥陀如来像に向かって行われる、聖なる舞や音楽の儀式に使われていました。

浮御堂は何世紀にもわたり、芸術家に人気の題材となっています。夕暮れ時に東屋の上を雁が降りてくる様子は、伝統に則って選ばれた近江国（現在の滋賀県）の景勝地「近江八景」のひとつで、歌川広重（1797-1858 年）が描いたことでもよく知られています。俳人・松尾芭蕉（1644-1694 年）はこの寺を何度も訪れ、お堂にかかる月を見て俳句をしたためました。この句は、境内の岩に彫られています。

満月寺は、平安時代（794-1185 年）末期に創建されたとされ、慈悲の菩薩である観音菩薩を祀っています。この寺の観音堂には、重要文化財に指定されている平安時代の観音像が安置されています。堂内の天井には金箔が貼られ、それと共に色鮮やかな花々が菩薩への供物として描かれています。